


 巻頭言

雑誌“植物防疫”について思うこと

近畿大学農学部研究員、
 島根大学総合科学研究支援センター 田 中 啓 司
 遺伝子機能解析部門客員研究員



執筆依頼を受け、雑誌“植物防疫”の使命と課題は？について、想を練ろうとした矢先、上路理事長の訃報に接した。驚き、悲しみとともに、新装なった雑誌“植物防疫”を誇らしげに、“趣を新たにしたのよ！”と笑顔で語りかけておられた上路理事長のお顔が思い浮かびます。本稿では、その“植物防疫”の使命と課題について思うことをまとめてみます。

「・・・それにしても、最大の農政課題と位置づけられた構造改革が「容易にすすまぬ」と嘆かれながらすでに半世紀を経過した。この失敗は本当に「市場原理不足」のためだったのか、「市場」のなかに投げ出せば「強い農業」はできたのか、「強い農業」と「活力ある農村」とは同じなのか・・・。」と書き出して始まる野田公夫氏の成書（日本農業の発展論理：農文協）を最近読み、農政の課題って？、“植物防疫”の課題との共通点、相違点は？等と思いを巡らせていた。なぜ、農政における課題が克服できないのか？、課題に切り込む方策・施策が正しくなかったのか？ 的外れだったのか？等。本課題に取り組んでこられた関係者は、真剣にこれらの課題に向き合って来られたと思う。ただ、理念が先行しての取組み、方策・施策で本質に切り込めなかったのではないだろうか？と、“植物防疫”のこれまでの編集方針を見るにつけ思うようになった。“植物防疫”編集のキーワードは現場に立脚した情報とその実態把握であると思うからである。

学生時代、研究室のお茶飲み部屋の書架に本誌の新刊が並ぶたびに、“今度の記事は何だろう？”と立ち読み感覚でパラパラと斜め読みし、それまで知らなかった、あるいは見たこともなかった病害虫（農業現場では顕在化していた）や新品種の作物の紹介、抵抗性・耐性問題や新規農業の開発状況など直近情報の特集記事を目にし、知らず知らずのうちに、これらの分野に引き込まれていった。これらの記事が、県や国の農業試験機関、JAの農業関係業務従事者、大学等アカデミアの研究者が、いろんな角度からこれらの情報をまとめ、詳しく解説し、紹介あるいは普及、そして、これらが抱えている課題についてふれられていた。現場からの生の情報が寄稿されており、新規論文を主体とする学術雑誌とは違った

情報・解説誌としての側面を持つことが大きな特徴である。これまでの“植物防疫”のバックナンバーを見てみると、農業生産、作物と品種、病害虫と作物保護、そのための技術革新、新技術や資材の紹介等、農業現場からの情報として取り上げられてきており、植物防疫に大きく貢献してきたことは間違いない。

三内丸山遺跡に代表される縄文人のクリ、イモ類や山菜を採取して生活していた狩猟採集から、弥生時代を経て、今日につながる定住、農耕牧畜への移行が、シナリオ通り問題なく進んできたとは思わない。農業現場での試行錯誤を経て、現在の農業形態になったことは確かである。私が住んでいる滋賀県の山間部で、終戦直前まで芒（ぼう、粉先端のトゲ）が長くのびた水稲の在来種‘シクワズ’が、イノシシによる稲穂食害の被害を低減させるために栽培されていたそうである。イノシシが登熟した稲穂を食べようとすると芒が口や鼻に触れ、わずらわしいであろう。登熟穂の形状を見ると、なるほどと合点し、‘シクワズ’とはうまい名前を付けたものだと感心する。イノシシが増え続ける現状、防護柵や捕獲では十分に成果が上がらず、長い芒を持った‘シクワズ’のような稲による獣害対策効果が期待され、各地で復元栽培されていると耳にする。またこの系統を品種改良し、鳥獣害軽減対策に取り組みないか検討されているとも耳にする。当然、食味、収量、登熟時期なども重要な検討項目であろう。このように、現在も農業現場で多面的に創意工夫がなされている。生物防除がIPM（総合防除）そのものである、あるいはそれを凌駕すると誤解しての発言を耳にすることがあるが、あくまで生物防除はIPMの中の一つの手段である。“植物防疫”の編集はこれら基本を踏まえ、IPMを包含する上位概念ICM（総合的作物管理）にしっかりと立脚されている。

農業、植物防疫に絡む技術の発展とグローバル化、そして関連する情報が簡単かつ多量に、そして瞬時に入手できる現在、その中身の見えわめが難しい。それだけに、現場に即し、咀嚼された2次情報に触れられる場として、現場情報としての“植物防疫”の存在意義はますます重要となる。今後の継続的な発行と農業への貢献を切に願う。

（日本植物防疫協会 理事）